

J 2.99:2

2 of 20

Aug. 1943

67/14
c

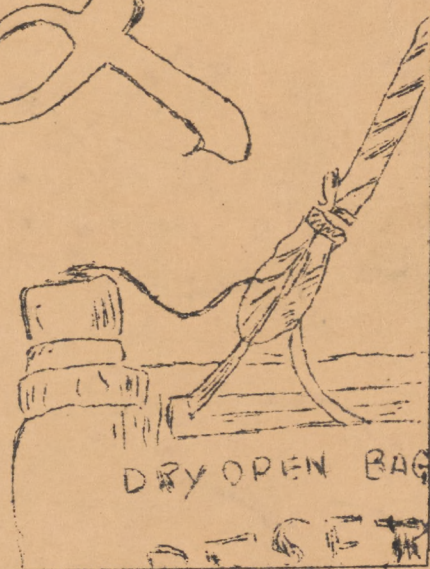


ポ
ス
ト
ン

文

藝

八
月
號



水の味

外川 明

涼しきは池のほとりのへちまの花の色
黙々と炎暑に耐へつゝ伸びるその瓜の一本。

蟬を捕へた掌に滲つて来る切ない郷愁。

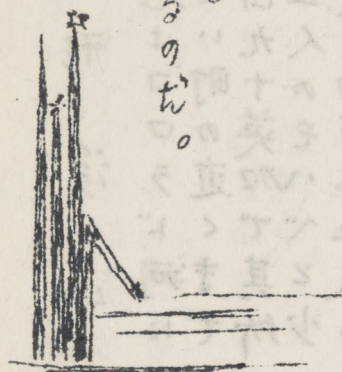
残月形の西瓜の一片をそつと櫓の下に押しやつて
その夜のこもった聲を想像する女であつた。

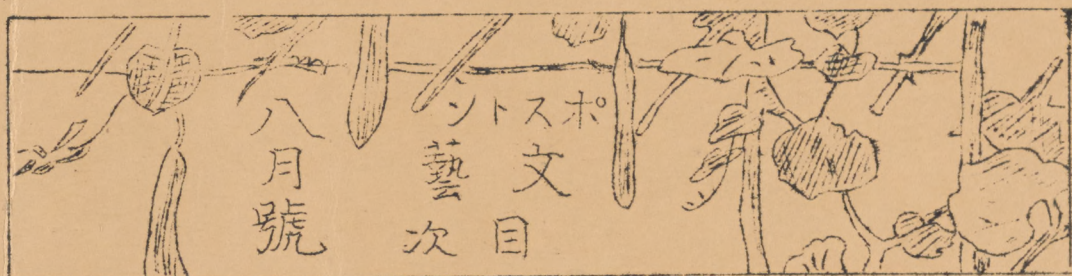
朝の机の上に見出した蛾のむくろの一つ。

何を飲んで見ても結局一番うまいものは水
ありかたいたの水の水、水の如くは生きてゆきたい。

眺めても眺めても砂漠の星空。

夜毎に濃さを増す銀河が反橋形にあつて
やがて地平から地平へといくやうにあるのだ。





表紙

外川明画

水の味

外川明

幸福の探求

隨筆古寺の一夜

ホ
ス
ト
ン
歌
壇
詠
草

思ふまゝ

短冊の歴史と認め方

オストン
御壇

三才句吟社句抄

自念の機

仁壽の巻抄

美休是林一亭等言

不_レ言_ハ三豆_ヲ

東川氏急草今

變通

詩

實
わ
ひ
こ
と

壇
一
恩
年

ホ
ス
ト
ン
盆
踊

ホ
ス
ト
ン
柳
道
作
12
12

川柳用語の分解

編輯部

五四四四四三三三三二二二二二一一一一
一四二一〇九八七二九五四二〇八六四〇六四二一

ソールトリバーの会合点の近くにありす広袤廿七万四千四百十七英加此保護地の中で純血種族は三百二十五人のマリコパと四百人のピマスでありまして他の大部分はピマスとアリゾナ内地の色々な種族との混血種であります併し全数の五千二百五十からの割合としては少数の率にしかありません。此の保護地の本部はサカトシに在つて政府によつて學校と試験的農園が設けられインデアンに利益の爲めに畜産と農産の開拓に研究が進められて居ります。ラビーンから七哩南方コマツコに傳道會が設けられており又ラビーンから西の方に學校があります。

フィニクスにかなり近い今一つの保護地はソールト河保護地でスカッデルから東にあたるベルテ河を北に沿つてマクダウル古要塞まで延びてゐます。其の広さは二万二千三百十七英町歩で人口は大約千二百人其の中で千百人はピマス族であります。尚又フィニクス學校管轄内にマクダウル要塞保護地があります。二万四千九百七十一エーカーを有し大凡九百九十人のモハベとアパチエスが住んでゐる。今一つキヤンポベルデ保護地と云ふのがフィニクス學校管下にあります。エーカー数は四百四十六で居住者は四百五十人のアパチエスであります。

（註）インデアンの用語は言語學の範圍に達しないものが多いあります。文學はなかつたのですがあるインデアンは結繩を以て文學に代へておりました種族もあります）（つゞく）

アリゾナのインデアン

矢形溪山

コロラド河代理権内にあるコロラド保護地はコロラド河に沿ってバーカーの南ユールンバークと云ふ古い町の近くまで拡張されてゐて其広さは二十三万二千九百九十英加で其所には三百廿五人のモハベと四百七十五人のモハベと少數の他の種族が居りモハベ保護地要塞には更に四百廿五人のモハベ種族がゐます。

アラハイ保護地はグラントキニオンの南でココニノとモハベ郡にあつて其境内は七十三万九千四十英加の広さ四百六十人のインデアンが住み其大部分はワラパイス種族であります。カイバ保護地は十三万八千二百四十英加に亘りモハベ郡最北端に位し此地方を占有する白人のインデアンはパユード種族であつてアリゾナに於ける全種族は西ナバホ代理所と保護地に三十五人コロラド河保護地に一人モハベ保護地要塞に一人居ります。

此中で最も興味ある保護地はハバスパイインデアンで有名なグラントキニオン国立公園の西境界にあります。グラントキニオンを沿つてゐる峡谷にある此保護地には二百一人のハバスパイスが五百十八英加内に生存して居ります。インデアン保護地中でフィニックスに最も近いヒラリバー保護地はヒラ河畔の両側を占めフロレンスより僅か西方に当る。

での過程に於て、つまり川柳者各自の日常生活に於て如何に多くの心理が浪費され、如何に多くの犠牲が自己に提供され、或るかと云ふ事實を否定する事は出来ないのである。早い話が私共には厄介千万な生活と云ふ手枷足枷がある。此れを征服してゆくには言語に絶する苦汁を嘗めねばならない。この事實は、俗にいふ「暮しが楽だ」「暮しが苦しい」といふ立場の相違に於て多少のハンデキヤッパはつけられても私共として此生活から逃避する事は絶対に出来ない。此ののみならず私ども自身につき纏ふ心理の複雑さと云ふものは、こんぐらがつた糸の如く、それをほごす為めにど程の心労を敢てするか全くよくも飽きずにもつれた糸をほ

5

ごしてゐることよ、である。かうした蟻地獄に墮ちた私共を取巻いてゐる「家族」「恋人」「友達」「先輩」「恩人」等々といふ才三者を考へて見る事で、果して呆然自失しない幾人が、其の間に在るだらうか。この等の人々が私共自身に關係が深ければ深い丈け、その人々には、人々に関聯して生ずる義理人情は計り知れぬ程あるわけである。それ等周囲の人達によつて、或る時は死ぬ程の目に合はされる事もあらうし、又或時は愧死しても及ばぬ程の迷惑をかける。大きな犠牲を強要することもある。こんなにも深い連繫が、柵が私共を緊縛してしまふといふことは、むしろ恐怖に近い感情ではないだらうか。(つづく)

一九三九、四月、きやり、ヨリ。

幸福の探求

品川陣居

この頃私は「幸福」と云ふことに就て考へてゐる。何がこの世間で幸福と謂はれべきものなのか。何を幸福だと云つたら其本態が掴めるのか。どうしたら其の手が、リが得られるのか。是れは一見、文学上の考察として見れば甘いやうに見える。こんな事は文学古典にも屢々取り上げられた事だし「幸福」を見喪はぬやうにして行く人間の態度とか前進の心構といふやうな事は砂糖の甘さを議論するに等しいかも知れぬ。だがやはり「幸福」を求めると云ふ事は、砂糖の甘さを求むるが如く人間の眞実への探求でなくて何であらう、ところが私どもはこの幸

福を求むると眞実を忘れがちなのである。

メーテルリンクはナルナルとミケルに冥の国までも幸福を採させにやろが結局は二人りの部屋の軒端の籠に「青い鳥」を見出させて「幸福」のありかのを案外手近な所に在るのを寓意してをるが、あたたくしも川柳者にとつても、この寓話は相当重要な性をもつて來べきだと思ふ。あたたくしもが川柳せず居られぬ心持即ち幸福を求むる心持だと思ふものである。言ひ換へれば川柳すること、が幸福にならうとすることだと言へると思ふのである。又さう思はなければ私共は生きて行かれないものであると思ふのである。必すべきであると思ふものである。と云ふことは、私共川柳者が自作を吾に翹へるま

盡の存在を認めるゆかにもゆくまいし まあ畫の間から泥棒
てもはいつて隠れてゐるとしか想像出来ないぬし
併し和尚は他の室は假令大事な室でも勝手に使用して可い
と許すのに何故にあの室だけ入つてくれるなと云ふのであら
う 俺にはどうもそこに秘密がある様に思はれてならないが
ふん 何か秘密があるか又何か大事なもの置いて居るの
かも知れない それで泥棒が入つて居るのでけなからうか
とに角和尚を起して見るかし
ついでだよ 和尚が入るなと云ふた室へ入らうとしたなど
殊に和尚はどの室で寝るか判らず寺中探すのには余りに夜更
けてゐるではないかし
律院は天台宗僧侶にはまだ妻帯を許さぬから和尚一人
に小僧一人の森閑とした寺で おまけに薄暗い境内尚ほ本堂
の天井裏に坐靈の足跡があると傳へられる 何だか薄気味の
悪い参詣する人も稀な淋しい寺であるから その閑静を買つ
て大学生が夏休暇の間読書に來てゐるので今や草木も眠る可
三つに近い時刻には全く静寂そのものである 陰々として暗
く広大なる寺内 何処からともなく聞ゆる微かな時計の音と
裏庭の泉水に注ぐ笕からの水声は反つて音なきに勝る深沈を
想はしめ又四圍の闇からふはりと襲ひ來る香の薫りは名状す
べからざる陰暗の氣を漂はすのである
つでは鬼に角あのお襖を一か八かもう一度開けてみよう 坐靈

隨筆 古寺の一夜

長谷川生

山水の清麗なることに於て恐らく日本第一であらう日光で
ある夏の夜十二時過ぎてからである。東照宮の向ひの山萩
垣面の中腹 晝尚ほ暗き大杉の社の中にある律院と呼ぶ古寺
の奥まつた室で二人の学生が低声に囁いて居る。間近き室内
を憚る誠に恐怖の態度である。
「君一寸今俺はあまり眠いので、あの室でひよつと寝る気にな
り襖をあけたのだ……」
「でもあの室丈けは入ってくれなと和尚が頼んだではないか」
「ん併し眠いもんだから さう云ふことは忘れてあて免に
入らうとしたのだ」
「ふんそれでは何したと云ふんだ」
「開けた襖の把手から手を離すとその襖が又スーッと元の柵
に独りでに閉つたのだ」
「君それは本統か？ おかしいぢやないかし」
「ほんとうだよ 何を好んで今時分噓なんか云ふものかし」
「でもそんな訳はないではないか、まさかばね仕掛けでもあ
るまいし」
「君戯談ではないよ、全く不思議だ、俺は何だか気持が悪い
君はどう思ふし」
「ほんとうとすれば全く不思議だね、まさか吾々は化物や幽

た襖である。押込もなければ一個の戸棚もなく奥の隅に一つ
の古火鉢があり。その外には室内中央に横つて居る蛇ならで
一本の藤蔓のみである。此の藤蔓こそ実に怪中の快であつた
のだ。察するに襖の壁の方に藤蔓がツツカイ棒にせられて
たのであるが、始め宮崎君は驚きながら静かに開けたので
藤蔓は除々に屈曲して面を延びたのであるが、筆者は力一杯
急に引いたので藤蔓は外れて空に舞ひ上り落下して蛇の落た
かの如き音を發したのである。誰か矛三者が物陰から二人が
眞面目な顔で定めし色青ざめて極めて眞剣になした此騒動を
見てゐたら喚おかしかった事であらう。

翌朝二人の學生を前にからりと笑ふ和尚は尚残りし一つの
不思議。それは前夜随分二人の頭に妖怪の事情あるかも知れ
ぬと疑はしめた基因即ち何故に広き寺中其何でもなき一つめ
堂に丈け入つてくれるなと謂つたかに就て説明してくれた。
其言によると和尚は実は長老格でその寺院の眞の大和尚は東
京上野の寛永寺に居られる、その方は既に八十歳を越えた老
僧で一年只一回この寺に來られる、その時老僧が好んで御滞
在なさる堂であるから、他の者はたれ一人入らぬ様にして居
るとの事であつた。一完

二と二では四だが吾間はさうでない。(館え坊)

や化物は決して居ないのだから 若し何か居るとすればそれは泥棒に定つてゐる 假令又物で向つて來ても室から出れば先づ一撃を喰はすために君は竈の方で手頃の槓を拾つて來給へ 僕が開けるから

宮崎と云ふ予ねて室内に入らうとした学生は、大きな槓を襖の前で大上段に構へる。筆者はとつてに力を込めた指先きをかけ俄然襖を引き開けた。

讀者諸君は斯の瞬間を私事に考へられますか 二人の学生の心裡状態を、又泰山鳴動して何が出たか 果して銳利な又物を振り廻しつゝ、人相の悪い泥棒が飛び出したでせうか 或は世にも不思議な幽霊が青い火と共に消えたと思ひますか 如併し現実には唯だホクリと大蛇が天井からでも落ちたかの如き音がしたのみです。果して大きな蛇が落ちた音であつたでせうか 若蛇のみであつたとすれば、さきに聞いた襖がス！と独りで閉つたのは何故でせうか 筆者等もまだ気味悪く

暗い其室に入れませんでした。

宮崎君 洋燈をもつて來給へ 私は此処でワツチして居るからし今度は自分が大槓を上段に翳してゐたが何者も出て來ない、そして室内には微音もない 宮崎君が運び來つた洋燈の光に室内を覗くと 嗚呼何たる事ぞ 唯だ三疊敷の間で奥の二方は壁を手に障子二枚で椽側に向ひ 自分等が今入らんとする方は半分壁であと一枚の襖 8
それが大乱狂を惹起し

清時文子

高校を巢立つ今宵の若人に加はる吾子の母なり我は

宮村一雄

潮騒の磯づたひなるこの道の椰子の並木の葉ずれ清しき

ワイキ、ビーチにて詠める

森すみ子

教兒の頬を流る、玉の汗講義とぐめて水飲みに出しぬ

岩永千代

蚊やり火をたきつ、友と語らへば夜冷え清しき十五夜の月

貴家志ま子

逐は水來てかゝるたつきに死にゆくは戦争イッサによる運命ならまし

久留島芙紗子

この轉住所マチもうつくしとみぬ月明く蚊やりの煙こむる夕は

北村ゆき魚

あきらめて御國のためと送りしも音信絶えて夜もぬら水ず

大原流葉

暑さをば言ひ譯にして何もせぬ我がこの頃の氣の弛みはや

西本まき

大き試験ツバミにたへてを行かむ同胞よやがて來る日のそなへなしつ、

林君江

レーヨンの傘一面に穴あけしこほろぎの害もゆゑしかりけり

北村利恵

晝のつかれいびきかすかに眠る子等健かな水は心和めり

赤星さと

洗髪かはかす折しも吹く風になびきて心地いとさわやけき



ホストン歌壇第十一回詠草

安高きち選

来るべき日の感激を魚がきつくづほれむとする我心むちうつ

何かありしこと明かさねど消燈のちも聲のみ泣くらしも吾娘は

クリークの水豊なり曰盛りを釣する人等ならびて黙す柳本錦子

打ちつづく暑さになえて床の上に轉がりつゝわが脈などを見つ綾織謙介

出でゆきし子の行末をじみじみと語らふ吾も妹も老いしか高橋東民

泌みぐと生くるかなしみ思ふ曰よ母のみひびに泣かまほしけれ望月みどり

本心をひたかくしつゝ心にも無きたはむ水を言ひて悔るにき升谷千代

なつの夜を老父と逢ひ見し夢さめて啼くこほろぎに胸せまりきぬ阿部秋野

エルムに添へて沿けにし白き花薫りほのかに室にたゞよふ安元時子

「相寄りて」上村氏の「選ばれし」清時氏の「瑩雪の」升谷
 氏の「残しゆく」森氏の「ほめられ」高橋氏の「若き日の」
 望月氏の「目つむれば」宮村氏の「悲しみの」ゆきゑ氏の
 「オレンヂの」綾織氏の「ひし／＼」と安元氏の「なみ／＼」
 としは何れも捨て難い歌である。
 この度は「静かなる浮世の中に生れきて斯くも我身はつれ
 なる歌の様にありけり」もよくない。それは「静かなる浮
 世」がどうも成り立たない様に思ふ。即ち静かであるならば
 世ではない筈である。そこで「静かなるこの現世に」として
 みたが私にはどうしてもこの世の中は静かな世とは思へない
 句と釣合がとれない。しかし作者が静かなる世と思へばそれ
 はそれとしてよいとしても「斯くも我身はつれなかるらむ」では
 何が故に「つれないのか」讀者にはわけが分らない。こんな歌を
 抽象的な歌だといつて嫌ふ。そこで何の爲に「つれないか」病氣
 であるならば病氣につき愛子がなくなつたならば愛子のなく
 なつた事を或は何十年間汗水流して築き上げた財産をこの度
 の戦争でなくしたならばなくしたといふ事をあらはに詠むの
 である。そうすれば「つれない等の言葉を使はなくては自然に
 讀む人にはお氣の毒だといふ事を思はせる事が出来るのであ
 る」斯ういふ様なわけで遂に捨てたがこの歌によると歌のこ
 ツを知れば上達する事が出来ると思ふから悲觀せず詠まる
 、餘に御す、致します。

友に似し友の娘の面見つむれば幼き頃の思ひ出ふかし
池田愛子

吾等の血を受けつぎし若人等すげなく過ぐる態度を見守る
古川紀南

折々にとりかへらるゝ枕べの造花あやめのこの美しさ
森岡枯木

久方ぶりの友と昔を語りつゝ眺むる月に日本恋ひし
大澤深泉

ホストンと思へば苦なし何のその草の葉しほる今の暑さも
峯景

夕立の模様に暮れて蒸す沙漠彼方の加州山はたた神
河島次彦

泥くさき水にもいまは呑みなれて吾が身まさきく今日をむかへり
永瀬勇

消防の稽古に高く水飛ばす其の水滴に虹立ちにけり
安高きち

後記

今回は一首のみの成績に依つて順序を定めてみたいと思つたがやはりそんなわけにもゆかず他の歌の成績を加味して順序を並べてみた。上村、兒玉、柳本、高橋、綾織、升谷、阿部、安元氏等の歌は共に佳い歌だと思ふ此の他、兒玉氏の「しづまれる」

昔私の学生時代に國語の試験の中に

大井川月と花とおぼろ夜に

一人〇〇〇〇〇〇波の音かな

とありました。

私は暗い夜に波の音を聞いたらさぞ淋しい

だらうと思つたので

大井川月と花とおぼろ夜に

一人さびしき波の音かな

と書き入れました

先生は

一人かすまぬ波の音かな

となほして下さいました。これは私が和歌といふものに觸れ

た始であつたのであります。

十数年前から折にふれては一二首詠じては楽しんでゐましたが勉強するでもなく批評して頂くでもなくたゞ氣まぐれのまゝでした。

舟出せし港を後に外國の

青海原の月を眺めて

これは二十数年前私が瘦米の際父の詠ぜしものであります。

さま／＼の花はあれども日の本の

はるの光ぞさくらなりける（詠人知らず）

これは學生時代に短冊に書いて展覽會に出品したことを思ひ
出しました。

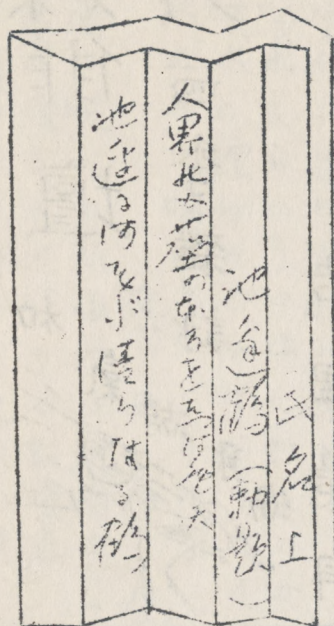
思ふまゝ

赤星さと

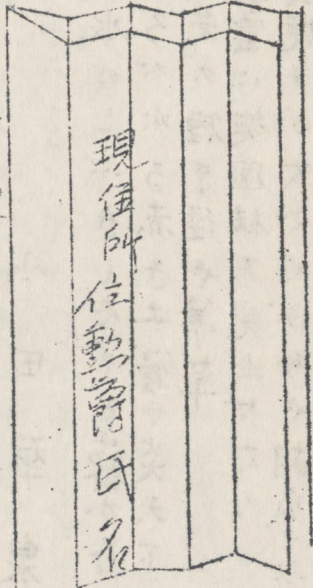
昨年の夏文藝協會が始ると云ふ廣告を見て行つて見たく
思ひました。が仕事に追はれ物學びに追はれ小それに自分の様な
者が行つてもよいのであらうか等氣をもらんで一ヶ月はいつの
間にか過ぎてしまひました。と或日豊留夫人が「安高さんか
ら是非あなたに和歌を出してもらひたい」との事を聞いて出
して見やうかと云ふ氣になり調度五六首詠じて居つたものゝ

中から二首を安高さんに選んで頂き豊留夫人にお願して文
藝協會に届けて頂いた。それから毎月歌の會に出席し永瀬先
生安高夫人によつて指導を仰ぐに至つたのです。又皆様の和
歌をも學ばして頂き両先生をはじめ皆様に感謝をいたすもの
であります。私の様な幼稚な歌を添削して頂くことは余程の
お骨折の事と思ひます。只今までかうつと出席いたしました
が今後も出席いたす覚悟です。からこの上とも御指導あらんこ
とをお願ひ申し上げます。
尚ホストン文藝に依つて数々學ばして頂くことを感謝する
ものであります。又何から何までお骨折下さる協会の皆様
にも厚くお礼を申し上げます。
△ △

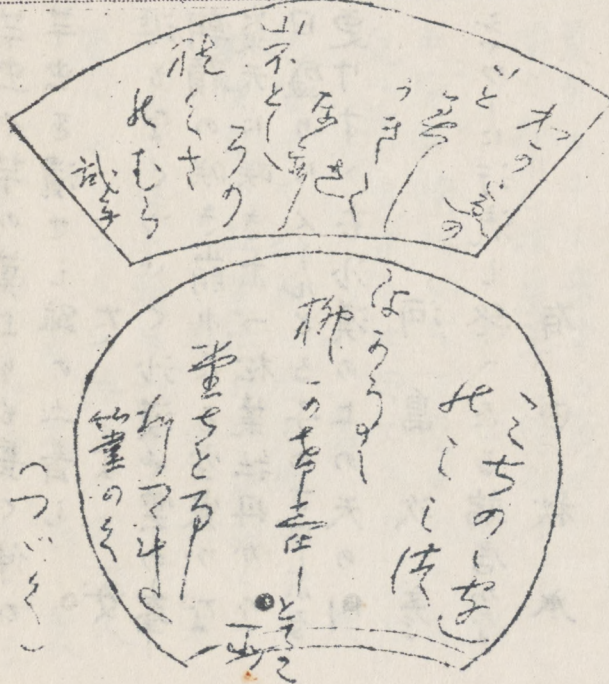
(左圖の通りニツ折更に五ツ内折)
 第一折の下に差出人の名と右
 下へ ^{クラン}と認む
 第二折には御勅題を
 第三折には歌上の句(五七五)
 第四折には歌下の句(七七)
 第五折に「宮内省御歌所御中」と
 して郵送すればよい。
 勅題は毎年十一月初旬に発表
 され、締切は大抵十二月十五日
 頃である。これは平時の一般
 の事いたまでの事で只今の時
 局に通用せぬ事は勿論である。



裏面認め方



帝位の認め方



短冊の歴史と認め方

溪山

條幅の書き方

- 一條幅の起原は平安朝以後
- 一條幅に俳句和歌一首等書くやうになつたのは徳川時代から少々現はれて來たが盛になつたのは明治以降である。
- 一書き方は短冊同様に、
- 一名は短冊の如くに下の句の下部にやゝ小めに本文に含めて入れる。
- 注意、本文に力を入れても名でこはすから氣をつけよく考へて書く事が肝要である。
- 一墨つき

散らし書きは自由に文意をよく見て生かすやうにする事。
の畫箋紙は墨が酒水易いから墨つきの所は軽く速く筆を運ばせる様に注意する事。
一名前のことを「落款」といふ。

16

認め方

「落款」は落款し落成款識の畧。
自詠の時は名前又は雅號だけ
他作の時は名前雅號の下へ
「書」の字を必ず入れる事。
落款は印のやうに誤らぬ事。
事が往々あるが之れは正しくない。

扁額の認め方

- 一扁額は明治以後盛になつた
- 一額は認め方が大々敷い。
- 一額には用紙の大きさに制限がない。
- 一部屋の大きさに随つて比例せよ。故に研究を要する。
- 勅題詠進の認め方
御會始は毎年一月に宮中に於て行はせられる。
詠進は誰にも出來得るが
一人一首に限られて居る
用紙は美濃紙豎詠草五ツ折

背割して頭はぬたる秋の鯖

和氣湖月

ドレツゲやは土捲り立て炎天下
集る兒みな銅金色よ水泳場
呀蟲や吾が丹精の甜瓜畑
落雷に焼けしメスキド原始林
片た陰の上に擢き出でこの花
片た陰に懸けし水銀百二十

モハベ誌

七月號抜粹

五十住 静遊

噴水や連に月碎け居り
噴水のしぶきの中に虹ほのか
噴水の鯉ゆるやかに廻りけり
風止みて噴水高く上りけり
篠田香虎
陽に映へて朝風渡る新樹かな
暮小残る水辺明りや蚊喰鳥
日覆や南瓜絡まる丸太小屋

安川 不似郎

葉柳の影疊み行く鴨の波
入営子を送る夏帽振りにけり
クーラーの音もうたてや晝寢醒め

山北涼水

枕蚊屋ふり返り見て出でにけり
クスモスにとまりて蝶のゆれて居り
音立て、花札を擲つ火取虫

小林千代

夏草の中に音する笈水
捕り外れし球夏草に隠れけり

小田華泉

王蜀黍襖めぐらす徑や瓜の花
兒の泳ぎ見守るは母でありにけり

小島生

垣根まで黍茂り居る住居かな
郵便車に松葉牡丹は花開く

田中白水

コロラドに映る朝月釣垂る、
夏川やたつきに倦みし配所人

青木落葉

出でし芽のホヅ樹蔭を造らざる
卒業式たふ兒あは小モハベの野

ホス俳壇

四季雜詠

吉里竜耳



短夜を裸寝のまゝ、明けにけり
大屋根を越して瓢の下りけり
蚊燻しのブラクブラクと流水けり
法話の座汗も涙も拭ひけり
ひねもすのプールどよめく酷暑かな
水泳着を脱げば真白き皮膚の跡
盤石を支や大樹や猛り百舌鳥

関野五松

形ばかり腹かくし寝る薄暑かな
読み飽きて頻りに眠し弥生盡
魚籠提げて旱りの道を戻りけり
射張りて掛けたは泳ぎ選手なる
池の面に榆の青葉の雫小戦ぐ

18

芋虫や芋の葉よりも長く伸び
芋虫を潰せし跡の土青し

たよ女

涯もなくつづく沙漠や雲の峯
朝顔の咲き崩れたる空家かな
炎天に咲き出づ松葉牡丹かな
日盛りにメールとる子のさばしる
更けすゝむ沙漠の上の天の川

河島次彦

シャワーに汗流し終へたる端居かな

有田秋水

病室の窓越しに見る花圃樂し

小田華泉

撒水のしぶきしたゝる藜かな

ころがれる赤き土管や炎天下

門先の短き徑や筧草

夏雲に旋風柱を見上げたり
青燒きの大どんぶりや胡瓜もみ
組にまろく肥へし秋の鯖

夕涼青利木子落つる音かすか

村 上 聖 山

池の面にはや夕立の二三粒
子子や岩のくぼみの溜り水
もろこしの葉さやけし夕涼

土 屋 天 眠

このあたり土人塚あり夏木立
夏草や昔土人の住みし跡
湯あがりの日本浴衣や夕涼

永 井 翠 畝

たわい男のありて嬉しき端居かな
怪雲のちぎれひろがる早かな
高居すや砂に字を書き話し居り

望 月 奇 風

涼人のざわめく声や鬼とぶ
蝙蝠の飛び交ふ庭の涼みかな

池 永 肥 州

用水の子子躍る眞晝かな
夕涼みお國訛の相寄りし

七月号所載、故壘井秋洋君追悼句の内、木村白嶺とあるは木村白嶺の誤り。
村上聖山の句「また月に」とあるは「また雲に」の誤り。
例会句の内「空の句」大蛇を」とあるは「大蛇を」の誤り。
安田北湖選の内「翠畝の句」街頭」とあるは「街燈」の誤りに付訂正致します。

課題「夏野」

木 村 白 嶺 選

水溜るほとり牛伏す夏野かな 奇 風
汽車は今夏野の果に沈むなり 翠 畝
小旋風の夏野に消えし眞晝かな 牧 山
セラウの嶺に聳ゆる下の夏野かな 牧 山
曉風に替り伏し靡く夏野かな 天 眠
百反野行く兵争急げる埃かな 一 空
旋風のたちては消ゆる夏野かな 北 湖
群羊の埃たて行く夏野かな 素 風
みはるかす百反野の果やセラウの山 玻 瑠 女
厳しき看守塔ある夏野かな 肥 州
開墾土の太き株太や百反野原 蘇 村
野茨の果しもあらぬ夏野かな 千 鳥

選者吟

日本村在りし名残や夏野原

順序誤写訂正——牧村——蘇村——千鳥——天眠

長谷川 逸 蒼

池の水静む間を目高かな

川の月蛸に馮かれて歸りけり

鍵和田 榮 保

バラックの庭にたくみの五雲塔

山 根 愚 公

森の葉に砂の礫や青嵐

和 氣 湖 月

日本庭向ひ合して涼みけり

爽籟や飛機一聯の空蒼し

婚式を短か夜のまゝ進めけり

ホストンや着古りし去年の夏帽子

マシナ吟社例會句抄

題「納涼」子子「雜詠」

安 田 北 湖

古墳堀る人やはるかに雉子の聲

潜り戸を出て入る子等や花瓢

子子や我は俳句の初年生

山 口 牧 村

伸びて來し蔓をいたはり軒涼

蝙蝠や暮れ迫まりゆくセラの嶺

土人村跡あるところ草茂る

岩 下 蘇 村

夏の日の暮れ待ちあぐむ映画かな

涼白木蔭に移し語りつぐ

蓄音機かけて涼みのひと延

森林 山 一 空

物識のニュースもて來し涼みかな

我が肚の確と決まりし晝寢かな

森の葉のそよとせぬ暑さかな

木 村 白 嶺

子子や溜りたまりに余り水

聞え来る映画臺詞や門涼み

セラの嶺のけはしき雲やはた神

石 井 千 鳥

月涼し庭の小草の動きそむ

新月や夕星つれてセラの嶺に

納涼やあちろちろの芝の上

田 中 素 風

能談に月かたむきし涼みかな

○第二に俳句は五七五の三節十七字の文藝であります。

この三節十七字が十六又は十五字となる称なことは余りありません。偶に下五を「日短かし」の如く四字で止める様な場合も御座いますが、この際は日を「ひ」と讀んで五音とするので有ります。所謂字足らずといふことは先づ無いと言ふてよいのであります。十七字が十八、二十或はそれ以上即ち字余りの句は折々見受けるのであります。而も此際と雖共五七五の調子に讀み得る様心懸く可きでありまして、俳句が十七字の文藝であると言ふ鉄則に變り無いのであります。

○第三に俳句は李の文藝であります。

李と申しますと四季即ち春夏秋冬の氣候、天文、地理、人事、動植物を意味するものであります。例へば草萌えといへば春の植物、汗は夏の人事、朝寒は秋の氣候、雪は冬の天文といった様なもので、それ等の数は幾百千あるか夥しい数であります。が悉く歳時記といふ書物に載つて居るのであります。まして俳句には必ずその一つを詠み込んであります。隨て李題の無い句は俳句と言ふ訳にはまきません。

處が最近これ等俳句の鉄則である五七五の三節十七字を無視し、李題を無視したものが流行致しまして、それに冠するに新傾向俳句とか、何々俳句とかを以てして居りますが、私共はそれ等を俳句として認めることは出来ないであります。

俳句の概念 山中俚汀講述

元來俳句は斯うして人を集めて講演めいたことをするのは
到て稀でありまして、私の十五六年の俳句生活にをきまして
も未だ嘗て一度も俳句の講義を聞いた覚えはないのでありま
す。たゞ一句でも多く作り一句でも多く作品を味ふといふこ
の二つが句修業の最も有効最善の方法であります。

處が私はみなさん方と申しまして最近お始めになつた
所謂初心者それ等の方々の句を拝見致します度毎に常に感ず
ることゝ御座います。それはそれ等の方々が果して俳句の概
念、即ち俳句とはどんなものであるかと言ふことを、明確に
認識して居られるかどうか詢に怪しむ次第でありまして、こ
れは恰度アリゾナの沙漠の上に樓閣を建てるが如きもので有
りまして、その基礎工事が堅固でありませんと、それがどん
なに立派な建物でありまして、
いものであると同様に、俳句とは何ぞや、と言ふ俳句の基礎
觀念が明きりして居ないと、折角の皆さんの御精進も怪しい
結果を見る惧れがあるので御座います。斯様な次第で私は此
際この点を明かにしてをき度いのであります。

。第一に俳句は文藝であります。

文藝と申しますと、小説、文章、漢詩、新体詩、短歌等々
悉くそれであり、俳句も亦その一つであります。



美術彫刻學校

一年生になるの記

時子

愉快な學校

それはおストーンに数多しといへども、おそれなく板谷さんの最近では十人余の彫刻家が手腕を振つて、次々に傑作を出して居られたい。今では板谷校長の他に二三の方が教師兼職人として移動があり、今では板谷校長の他に二三の方が教師兼職人としていたところでは、氣候のせい、か近頃神経衰弱になりかけて、フラフラと迷ひ出た私、ある日、偶然にも途上で板谷さんにお目にかゝつた。元氣ですか？ どうしてゐますか？と先方から声をかけて下さる。近頃なんだか変な氣持で、そこらの枝ぶりが氣になつて仕様が、ありません。何か、事ありませんか？と大變な挨拶をして終つた。遊ぶつもりで私のクラスに來ませんか、それはいけな。遊ぶつもりで私のクラスに來ませんか、変り種が揃つて居て、とても面白いところですよ。時間も自由です。心機一轉しますよ。と、板谷さんもなか／＼勧誘がお上手です。そうね、ちや明日からお伺ひしてみませうかしら、と云ふ。

印籠の巻揚

鈴木胡仙

狂歌の名人蜀山人が嘗て水戸中納言光國郷の許に遊んでゐ
せん。光國郷のお持ちになる印籠が欲しくて欲しくて堪りま
せん。どうかしてそれを巻揚げて呉れようと思つて時々謎
をかけて見たがどうも呉れそうで呉れそうにない。流石の蜀
山人もこの印籠には殆んど望みを絶つてゐたが、まだ何とな
く印籠の紅が彼の心の裡に彷彿つてゐた。
水戸邸のお上屋敷の御園庭は緑滴たゝる名木芳草の若葉が
全庭を掩ふてゐる。その中に絢爛として咲き誇る枝垂櫻は中
春の夕陽を浴びて一入の趣緒を添へてゐる。光國郷は近待数
名を従へてこの園庭を散歩しながら仰いで將に暮れんとする
夕霞の空を眺め、何もかも感想しつゝある様である。丁度其
所へ通りかゝつた蜀山人を呼びとめ、木々蜀山いゝ所へ來た
其方この春の夕景色を一つ詠んで見よと仰せになると、ハ
ッ！と答へて蜀山人は即座に
印籠の緒の長が／＼しこや春の日のく水そうにしてく水そ
うもなししと詠んだ。
すると光國郷は声高らかにお笑ひになつて「其方はそ水程
までこの印籠が欲しいのかし、それと云つて印籠を蜀山人の
手に渡された。」

「い、え此処にもそんな六ヶ敷いものがございますか」と

何を言ひ出されるか。じや／＼して居る私へ

「入学したら校則として流行歌を唄ふ事になつてゐますから

何卒唄つて下さい」と真面目な顔で仰有つた。ほんとう

「そんな校則なんて困りますわ、無理ですよ」と。ほんとう

に困つてゐたら、重子さんが見兼てか裏町人生とやらを可愛

い声で唄つて下さつた。

新入学生の急場を救つて下さつた重子さんをとて、好きに

なつた。校長さんの巻図で先づ手ならしに小さな物からスタ

ートする。あぶない手付でノミを振ふ私を皆さんが代る／＼

手傳つて下さつた。わけでも校長さんはアメリカンタイプ

とでも申しますか。女生徒には特別に親切な方らしい。手を

切らない様に、大丈夫ですかと度々注意をして下さる。又深

山さんは精密な仕事にかけては特別な伎倆を持つて居られま

す。入学以來一ヶ月曲りなりにも私に二三の作品がありま

す。其の間板谷さんを始め皆さんほんとうに良い方ばかりか

し。其の不愉快な氣持はまだ一度も起らない。其処に板谷さん

の人の格の良さがあつた。良い感化があるのではないでせうか。

かうした零團氣の中で一生働けたらどんなに愉快だらうと

切實に感じました。文豪、藝術、音樂等々語り合つて、口角

泡を飛ばすかと思へば、恋愛論に実が入り過ぎてノミが脱線し

たり。又蚊の鳴く様を校長さんの詩吟が午さがりの気だる

款で早速翌日から生徒の一人に加えていた。

品が所せきままでに陣列されてありす。七福神を風景を

と皆さんが熱心にノミを動かして居らつしやる。

板谷校長が彫りかけの観音像を片手に皆さんに紹介して下さる。何氣なく奥の方を覗いて見ると山田如骨氏が一心に何かを彫つて居られるので「何が出来すかしと背後から声をかけたらしや」いらつしやい字を彫つてゐますよ、次彦さんの作ですしと殆んど出来上つた見事な短冊を見せて下さつた。「まあこんなきれいなものが出来すかし？私にも是非教えて下さいませぬしとお願いしたら、傍から深山教頭が「山田さんは村上ドクターですからしつから教えてお貰ひなさい」と仰有る。判断に困つて近眼鏡の奥で瞬はつかりして居たら、今度は佐々木副校長が「村上ドクターは痔専門ですよ」と判じて下さつた。成程山田さんは字の方を専門に彫つていらつしたのかと漸く判断がつきました。此処ではこうした隠語しか通用しないらしい。全く変り種だなと内心ビツクリしました。綾長格らしい山田さんが今度一人々々紹介して下さつて「時子さん此処は普通人が来る処ではありませぬ、此種精神病患者が集る処ですからそのつもりでね、此処に来る以上貴女もその一人です」と釘を打たれた。そして校則を知つて居ますかしと尋ねられた。



ポストン雑記 (三)

或る宵 貴家志ま子

用事の爲 部落のバラックを 訪問した丁奥さんは 居合せた未知の男性に向つて 軽い会釋をした。この家の主人は入來の丁奥さんに かの男性を紹介した。二人は型の如く初対面か口上を述べ終つて それぐ腰をおろした。

紹介された部落マネヂヤーは 入來の奥さんに対して 途方もなく 遠慮勝ちの態度を してゐたにも拘らず 結ばれた口の一旦解けるに及んでは その辯舌滔々として 諧謔の内に眞実を込め 加ふるに意気洋洋たりで見ることから 前途益々有爲の快男子型である。ホストンの強烈な日光の直射のためか 顔面は全体に少し黒朱を墨し 見受けるところが 機嫌斜ならずである。ホストンの強烈な日光の直射で、ネー奥さん こんな集合所の 部落マネヂヤーになんかなりましたら みんなのサアヴアントも同然ですぞ かつ又使ひ小僧にも なつたりぬ 奥さんこの使ひ小僧たるや凡そこのキヤンソ社会では 部落マネヂヤーの 右に出づる職

とうに他所には見られぬ清福な彫刻場です。

「入学した其日板谷さんから、何か書く為に来ましたか」と言はれてハツとした。如骨氏も頭に湯氣をたてながら「凡才さんあんなにひどくコキおろしてひどいですねーあなたと云ふ人はあんなにも皮肉な人なんですかし」と抗議を申込まれた。ほんとうにすまない事をした、もう絶対にあんなものは書くまいと思つて居た私。又どうも持病が再発して書かずには居られなくなつて愚筆をふるつてみました。併し今度は板谷さんの検閲済みです。許可を受ける為に原稿を持つて行きましたら「僕の事はどうでもいい、が深山さんはまだ独身ですからよく書いて上げて下さいよ、悪口書いてはいけませんよ」と注意をうけた。こんな風にお互が勞りあつてゆかれるこまやかな友情に胸先に熱いものを感ぜました。又此処の先生は彫刻家であると共に詩人なのです。太陽を雲を煙を見るものすべてが詩になるのです。なんとなく味氣ない此処の生活の中にからいふ良い友を得た事をほんとうに嬉しく思ひます。皆さんへ念の為にもう一度御紹介いたします。ブラック十二——十三——B が愉快な学校即ち精神治療養所なのです。

何卒御遠慮なくどしどしと御入学下さいませ。

るものです。何も新しくなくともよいです。汚くともそ
 れをですなあ——一帯のお金と思つて慌て、4ヨコン
 と拾ふのです。ネー奥さんさうでせう。人はペニー一
 ども見つけたら斯う云ふ具合に大急ぎで拾ひ上げて早
 速ポケットに突込むでせう。ネーこの式にみんなでや
 るのですよ。便所の掃除をね。おきかせ下さいまして
 有がたらございましてと奥さんは笑顔で言つた。
 「イヤ」 どう仕りましたし
 快男子の部落でネゲヤは斯う云ふが早い。慌て、思
 ひ出したやうに急に立ち上つて直立不同の姿勢となり
 「ヤアー奥さん初めてお目にかゝります。こんな奴ですが
 どうぞ。宣敷くお願いいたしますし
 丁奥さんは初対面の挨拶を二度も言はれて返す言葉に
 まごついた。そんな事には一向に頓着しない。快男子マネゲ
 ヤーは部落の諸問題について解決の良法は斯く斯くで
 あると熱辯を振ひ乍ら身振り表情タツプりにこの宵を
 語りづけた。

一九四三、六、二八

人ごとには唯君だけと比喩しやべり
 天命を樂しんでゐる裏長屋

(蛭蟬坊)
 (剣花坊)

を開いて

「過去三四週間の私の境遇は呻吟そのものであつたけれど、是れは過去全体に犯した罪惡を清算せねばならぬ事と思ふ。我慢した然るに今朝から来た二女の看護婦によりて吾にも餘なる親切を取扱ひと言葉をかけられて、水一杯すら自分のためさるに枕頭に運ばれてある。これによりて自分の心の悶えは喜びと化し只感謝のみの心境になつた。其人の名は知らぬが白衣の看護服に白のハットを冠つた若い婦人である。それを訊いて其事を文藝誌に発表してせめて受けた恩義を感謝させて貰ひたい。それで私は悦びの中に瞑目する事が出来る。強い握手を三人と交した時には注射も哀へて希望を云ひ終つた口元に微笑みさへ湛へられて半ば朧ろ氣な瞳をつぶつた。室を出て栗川君受持の午名の看護婦に訊いたら其婦人は最近新しく就職した寺田トシ子嬢とてブロック三十に住む二女の方である事が判つた。

ワードオ四号の患者の口からも寺田嬢賞讃の声を聞かされて其名全嬢が三十区の柳友寺田山客氏の令嬢と聞くに及んで私は嬉し涙にくれた事であつた。柳友山田如骨君は此言葉を奇らして寺田夫人に感謝の言葉を述べたのに対して夫人も亦感涙に咽ばれたと聞いた。

私は茲に多くを語る事を止める。併しホストン二万の同胞が立退以來苦痛の中に一番気の毒に感じ一番苦しんで居た人は

柳人土屋栗川君を悼む 矢形 溪山

七月廿一日の午後三時凡才君が来て

つとう／＼栗川君は逝つた。

亜然として私は筆をおいた。

「今朝行つて見ればよかつたなア」と三人顔を冠合せて

暫し無言の編輯室が續いた。

再び起てない君の身体ではあつたが、かうした大きな変化

が一二日の間に起らうとはお互の夢にも想はない事であつた

七月十九日の午後三時病院から一青年がノートを持って来

て今日中に一度栗川君を訪れてくれとの事であつた。

倉惶として凡才虎山二君と病院の特別室に入り 今一二日の

間に急に變つたいたましい氏の枕辺を囲んだ。

栗川君は息苦しい中から

「今注射をしてる 暫く僕に觸れずに待つてくれと云ふ表

情である。

息づまる此情景を吾々三人の心の中を今私には連も筆に表け

し得ない体験であつた。

十分は過ぎた……今少し残されたであらう呼吸器で全身を

支へねばならぬやうないた／＼しい息づかひであるが 会見

に用意の注射に醒めた君は眼も頭も明晰であつた 徐ろに口

「日本へさへ歸る事が出来れば満足だ」と云つて居たが最近になつてからは「萬事休すの心の準備が充分に整つてゐた様に思はれた。

時々の訪問に

「もう僕は回復しない方がよいと思ふ。凡てに於て思ひ残しはない、遺言は一二人の友人にしてあり、少しばかりの金も人にやつた、今更に残りの事は一ツだにないし、一点の生に執着を持たない心境は眞に冲天にかゝる眞如の月を見るの感があつた。

私は過去に於て父母を失ひ妻に死別し教へきれぬ同胞の病者を訪れ其の死に遭遇した中にも君の如き高邁な理想に終始し生死の間を彷徨するに微塵の懊悩なき最後に接した事は氏を以て初めとする。

軍籍にあつた氏は此間の精神練磨の功を積んだ大なるものある事は認めるが何れにしてもわがボストン柳壇から「栗川」を生んだ事は藝術より學ばんとする所を如実に教へて行つた先驅者たるを失はない誇りである。徒らに文藝蝸牛の争をなすを慚みて氏と共鳴するものあらば慥に地下に栗川は笑みて眠るべきである。五月二日最近の柳人栗川の作品には群を抜くものがあつた。課題「暗い」島原潮風氏選に入選したものに山の色見せては消える稲光に栗川が光つて居る。

病弱の同胞で栗川君と思ひを同じくしてゐる人がそも幾人であ
らう。誰を怨む事も出来ない怨濤に押し寄せられた惨状であ
るけれど……病院を訪ふ毎に其思ひを新にさせられる。
私は此奇特な寺田嬢に個人として文藝人を代表して懇ろに
其勞を稿にしたい。全嬢の存在はひとり一人の名誉ではない
病院の爲めにホストン全体の爲めに明るい將來を持つ存在で
あり友人としては土屋君最後の精神を轉向せしめた恩人であ
ると信ずるが故に。

土屋栗川幸次郎君は千葉の出身長身瘦軀調つた容貌に美髯
をたくはへ常にステッキを携へて歩行し一見紳士の風彩があ
つた。一度会談すれば縦容として逼らず淳々としてよく時を
を論じて止まぬ氣慨があつた。
入院までは必ず句会には出席する熱心であつた丈けに五
月以來の氏の欠席は句友に淋しさを感ぜしめた。氏は特に席
題の空氣を愛し病床の中に屢々
「あの席題を作る時の静けさにペンの走る音のみが聞える感
じは私の忘れ得ぬ樂しみである」と歎じて居た。
六月に入つてから三週間程の間に息づまる苦しい日が二三回
続いてある時は四十五分間も手あてを受けずに居た事さへあ
つた。此間に君の状態は急に悪化した程に思はれる。
入院当時の君は

故土屋栗川氏追悼吟

ホストン川柳同人

また一つ星の流れて淋しい氣
柳友の計を手にして寂し朝の露
何時の目か故郷に計報届くのは
木枯しに落ちる桐の葉あと淋し
ホストンに蕪り残して君は逝き
柳友が一人沙漠の露と消え
新時代建設半ばは友は逝き
表札の消えて淋しい趣味の友
流星が一つ地に落ち悲報に泣き
さびしから花の浄土のひとり旅
詩の反遊つて淋しい文藝誌
悲報聞く夕焼雲へ蟬泣けり
アリゾナの沙漠淋しい流れ星
柳友へ繰つて平ふ名句集
もうあへぬ御霊へジツと掌を合せ
数々の遺句読み終へて掌を合せ
何友の計へ噫あの時はこの時は

青山 まつる 枯木 狂雨 晚香 眉山 子守 光葉 香風 時子 白峯 春波 竜耳 緑泉 亜洲 高羊 素人

幻に画いて逝つた白い花
ふみ月も過ぎて白紙に柳句なし
友逝つて睨に浮ぶ句会の灯
友の計へ満堂淋しい香の煙
栗の木が枯れて淋しい秋が来る
夏の夜の映夜寂しい会者定離
天命へ諦めきぬぬ香の煙
逝く友の魂も反らん会血踊
暗然と遺稿へ愧ぶ友の面影
よき個性見せて栗川女と別れ
川柳へ大悟句友の大往生
諸行無常句友悟つたよ寛悟
稲光消えて淋しい沙漠村
潮 凡 才 虎 山 次 彦 牧 東 胡 里 東 大 訂 幽 舟 如
凡 山 才 虎 山 次 彦 牧 東 胡 里 東 大 訂 幽 舟 如

他に

病床に月見はかない室の内

準備した歸國はかく夢となり

あきらめた境地が生んだよい準備

悉く君の心境そのものを宿はれて名残りの盡きぬものがある

最後の会見後もう一度逢へなかつた事は心残りではなないが天使の如き寺田嬢の看護の下に息を引とつた氏の臨終はせめてもの慰めである。

廿三日夜八時半長藤開教師によりてお通夜の営みがあつて身寄りのない君の爲めに意外多数の参集者があつて柳友の数をも共にしめやかな一夕を過した事は氏の最後を飾る有かたを感じた。葬儀は七月廿四日午前八時半ホーストンオークヤンフ四十三区のリクリエーションホールに於て長藤導師 石原開教師列席下つて会場は一杯の会葬者があり文藝協会からも数多顔が見えて凡才君のお骨折りで生花の花輪が贈られ感謝に堪えない次男であつたと同時に四十三区の方々の厚情に心から尊敬の意を表した。ホール前で二宮さんのお骨折りで撮影を終りやがて一同起立合掌の内に極は徐ろに北に去つた柳人栗川の微笑みが睨に浮び熱きものが頬を傳へば眞夏の陽は遠慮もなく会葬者の顔を射て止まない。合掌。

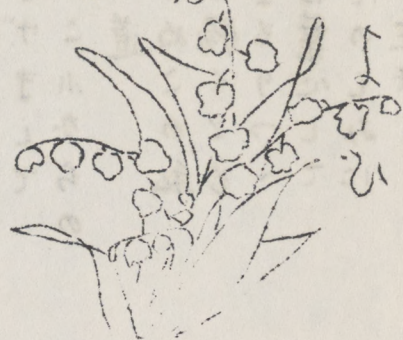
わびごと

や

よひ

葉子よ
愚かな母を許しておくれ
心に育いた母さんは
理性を失ひ道徳を忘れ
可愛い、お前を偽って
この転住地を
離れようとしてる

古人の冷罵を浴びても
白眼視されても
恋故に忍んでる母さん
信仰に進んでみたが
静に反省もしてみたが
結局は無駄な
努力に過ぎなかつた。



まだ肩上げもとれぬ女学生の姿のまゝで お前の父さんに
嫁いで来て十六年、冷酷な、そして愛情なく、精神的に荒さ
れぬ囹圄の称な家庭生活。

お前を護つて お前だけに生きて来た母さん。
葉子よ 今私は一人の異性に全心を捧げて慕つてゐる。

長い間胸を病んで苦悶のうちに逝つて終つたお前の父さん
あれからもう三年 お前を護つて どんな障り物も襲つてく

るであらう暴風雨も 征服してゆかうと心に誓つた母さんだ
つたが やっぱり私も弱い女だつた。

やがては不忠誠な市民として出て行かなければならぬ彼。
葉子よ 伶俐なお前も もう十五才 どうぞ侮蔑しないで

おくれ 軽卒な母と嘲笑はないでおくれ。
そして母さんのたつた一度の我儘を許しておくれ。

愛

美 登 里

憎み合ふて暮すには
傷つけ合ふて過すには
余りに人生は堪へ難い

溢るる「愛」の微笑みが
つかれた小さな魂に
希望の光となるものを

優しい「愛」の言の葉が
主くる憂苦にうなだれた
うなじをもたげ支ゆるを

あゝ愛のみぞ愛のみが
短い地上のいとなみに
希望と平和を満たすもの。

若 ぎ 五 等

清 水 貴 石

風が十字に

荒らぶ水狂ふ

モハべの中の

ホストン館府

此処に身をおき

胸さしいたす

若き吾等は身体も強し

若き吾等は希望も貴し

コロラド河の

流水の如く

心も清く

ホストン男子

律義廉恥を

思んじいて

若き吾等は剛健にして

若き吾等は理想もたかし

ポストン
きやり立白頭

はると

ア、ハ、ハ、

さあさみなさん

お機嫌如何

今宵はお盆ぢや

みなさんとも

おどつて笑つて

笑つておど

ひるの暑さを

忘りよぢやないか

丸いお月さあも

笑つてごぼる

ア、ハ、ハ、

住めば都

こゝポストンも

朝は涼風

紫色の

山にチヨイと出る

朝日をうけて

空の色香も

色とりんとに

げにも美はし

ポストンの朝

ア

ポストン名物

砂嵐

これにや一寸ばし

辟易すれど

何のこれしき

ホストニヤンにや

すじがわ入りの

五体がごぼる

来よや艱難

とりくみくれん

ア、ハ、ハ、

夜はよいとこ

忘らりすかポストン

ひるの汗をば

41

シヤワーに流し

チヨイトひつかけた

下駄ばき姿

老若男女の

寄合ひ涼む

心地よいかよ

そよ風夜風

ア

上げる手先に

てりかへされて

月の光も

さつと散つてとど

今日を限りの

お盆ぢやないか

積る苦勞も

今宵に忘れ

サアサ皆さん

元気でゆかうよ

ドンドコドンドコ

ドンドコ

一週年

ゆたか

貴夫が逝かれて一週年
むづにも忘れぬ去の年

七月十三日の

あのひどかりし雨の夜に

貴夫の戦死なされたる

軍部差出の電報を

掌にした私の胸の裡

今日も思ひをあらたにし

貴夫の冥福いのります

可愛坊やも私と

貴夫の前に跪き

お掌々合して口籠り

パパアツ今と言ってます

坊やはあなたがいっつの日か

眠りなさると思ひらく

時折キャンフおとづれる

軍服姿の人みれば

駈よりお顔あをぎ見て

懐しさうに

懐しさうにいつまでも
づつと視つめるいちらしさ
又或る時は軒下を
どなたか通る足音を
耳をすまして聴きたがいし
幾度か外に走り出て
寂しそうに
寂しそうにしてゐます

沙漠のあらし砂埃
百十余度の暑き日も
あなたを念じ兒を思ひ
今日まで忍び耐へてきた
私をなだめはげまして
護つて下さいこゝろからの
悩の多き人の道
行かぬばならぬこの私
女のわたしは弱くとも
神のみ教へまもりつゝ
あなたのお言葉心して
坊やの行末たのしみ
母の私は強く生き
あなたの冥福いのります

川柳第一回紙上互選

課題 うぬぼれ

天 鈴木胡仙

自惚れた過去へ淋しい姥櫻

地 野田鏡水

髭剃つて眞更でない顔を撫で

人 山西里江

笑はれて居るとは知らず通ひつめ

客

揭示板めが名ばかりが太く見え 素人

うぬぼれの北月を世間の目が笑ひ 留雄

うぬぼれを上手に使ふ妻の智慧 枯木

うぬぼれを妻は眞顔で聴いてく小 虎山

風呂の中自分の声に一寸ほれ 青山

秀

うぬぼれの心見合の茶に破れ 溪山

うぬぼれが過ぎる夫を瞳で叱り 眉山

自惚の後が淋しい歸り道 立上

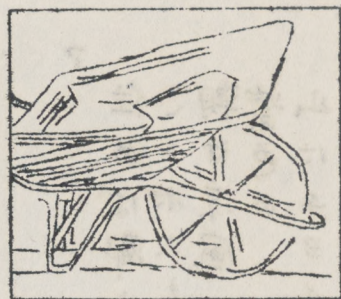
述懐へ自惚が出て座が白け 高羊

うぬぼれて狙ふた椅子に落付かず 孤島

自惚があつてはるせた細工物 竜耳
うぬぼれの美貌が縁を遠くする 注水
転住所十九弗へうぬぼれる 虎山
自惚が採点表を白く見る 高羊

佳作

うぬぼれる程は世間で買ぬなり 竜耳
自惚と知れと黙つて妻は聴き 大海
うぬぼれの齒を鏡見のがさす 彦四
うぬぼれて娘婚期をとりにかし 子守
自惚が多くて困る共生活 墨田
うぬぼれてうぬぼれて居てまだ独身 凡才
うぬぼれの氣持を友の髭に見る 溪山
うぬぼれた記事はつかしいペンの跡 時子
うぬぼれを尻目に娘他家へ嫁し 春波
うぬぼれて見ても似てない肖像画 法水
一席の妻座に堪へずそつと逃げ 栗川
自惚れて負ふた荷物へ汗を拭き 胡仙
自惚れて取組む力士土が付き 訂村
まだ若いつもり見返す写眞眞顔 鬼氏
うぬぼれの歌へ聴衆の野次が飛び 眉山
自惚れて居ても時々に勝てず老い 潮風



ホースント
柳壇

第二十一回 七月十八日

課題「音信」 溪山選

天 山 本 竹 涼

詫び手紙嘘を知ってるペンの先

地 綾 織 離 羊

所外便大都四ッ角眼に迫り

人 横 田 草 雨

来れば来て不安に開く軍事便

客

繪葉書は出所を誘ふやうに来る 柳華

別々に住んで夫婦の花便り 迷舟

音信の絶えた故國を知る電波 巴水

安着の世永書一枚と水つきり 竹涼

征った息子の便りを待つて今日も暮れ 五松

糸乃

無事丈けの便り嬉しい赤十字

母の声次第にかすむ息子の便り

愕然と夜の訃報を握りしめ

旅の子の手紙母には短かすぎ

音信を絶たれて通ふ夢と夢

悪筆と別に誠意のある便り

諦めた娘にも未練なメール函

音信を断たれ風雲身にせまり

囚心の窓へ便りを待つ日暮昏

音信だけ忘れなと云ふバスの窓

快くなつて始めて知らす母の風邪

征くといふ文を見守る母の胸

ためらうてあの時焼いた母の筆

音信へこころも出さぬ罪を知り

出征の息子の音信に寄る笑顔

軸

失業へ出所促す息子の書信

集句 百四十一

巴水

静江

竜耳

虎山

草雨

一沙

光葉

露角

留雄

青山

素人

胡仙

白雀

巴水

大海

此等は動詞止めとして以て
 なる。此れも決定させて詠む
 のであるがこの他副詞「サ」の
 字で止める場合もあるが此れ
 は形容詞を助け言葉により美
 化的に又は余韻を保たせる場
 合に役立つ
 凍る夜と知らず金魚の和やかで。
 筍も土も日本のならしかさ。
 虫の音を聞き別けて見る夜の長さ。
 などである。此れも川柳構成
 上の重要な役割を持つて居る
 次に同じく動詞止めであるが
 此れは数が多いから独立させ
 て提げるものに居居る。の
 止め……同意味でも下五の
 字数の場合で三つの略し方が
 ある。
 嫌はれて居るとは知らず喋つて居。
 弄さみに女房の意見聞いて見る。
 泣き笑ふ皆の顔がゆがんでる。
 この略方は川柳以外にない特

長でそれ／＼味つて見ると
 なか／＼面白。
 (三) ル留めは居るの他に色々の
 動詞が用ゐられて居る場合があ
 るからこれを独立させて見る
 と好い効果をあげて居るのに
 氣がつく。
 〇子の寝顔又決心をにぶらせる。



北米柳壇流星の跡を偲びて
 村岡鬼堂
 何時見ても母寝不足を隠し切り
 別々の夢見て父と娘の暮し
 歸米の子雲の行方の祖母を恋ひ
 子が釣の白毎の魚に猫も飽き
 安井白
 見せられぬ涙奥歯に音がする
 積板の上に晝寝の弟子大工
 摺れちがふ人にも夏の季が匂ひ
 失言を娘笑つて叱られる

川柳用語の分解 三宅巨郎

從來私は川柳を詠かた場合
に相手の職業を詠んで説明し
てやる事にして居る。其れが
一番早解りし易いからである。
。故郷が同じで巡査よく喋り。
。コフーへ巡査がナリと腰をかけ。
何かの用事で来た巡査の一寸
したヌキを詠んだものだが、
こんなものを見せると「ア」左様
ですかと理解をしてくれる。
其所で川柳を構成するには、
これだけ作句上必要な常識を
各込んでほしい。

一、川柳の字数云ふまでもなく
十七字で上五字中七字下五
字で大体出来てゐる。此他に
破調があるが他目に譲る。

二、既制用語　これは作句の常
套手段として用ゐられる言

葉で色々な場合がある。一番
変化のある下五の止を引例し
やう。

- (イ) なり　で止める場合
。便衣隊事がばれるとわめくなり。
。定價表胸算をして這入なり。
。これ等ナリけ也で事を決定
的に現はす場合に用ゐる力強
くズバリと云ひ切る時に功
果がある。ナリでも成の意
味は薄弱だ。
- (ロ) 動詞で止める場合
。ストーブ(宿直)いつか眠くなり。
。香水を贈れば女嗅いで見る。
。電報へ達ふ子を少し怖く立ち。
。此他終り買ひ等も亦少くな
いがどれも皆川柳のコツと
云ふよりも手段である。
- (ハ) 形容詞で止める場合
。一票に公民と云ふ氣が強い。
。留守番の外には春が美しい。
。肩書も捨れば旅も面白い。

川柳第二回紙上互選

課題、妻女 七月三十日

天 石川凡才

妻だけの味方で貧の底を越へ

地 鈴本胡仙

老妻の寝顔へ悔める己が過去

人 野田鏡水

産衣縫ふ妻のミシンの弾む音

人 鈴木胡仙

新妻へ内証で棄てる古日記

客 矢形溪山

知りぬてほえむ妻にある強み

客 山田如骨

別れ住む妻へ恋文めきて書き

客 墨田まつる

一輪を沾けて配所に妻の趣味

客 稻垣牧東

逆境に立つ度妻の良さの知れ

客 矢野兔氏

妻が来てやつと人間らしくなり

客 青木丈太郎

收容の夫へ妻は強く生き

秀

時局談妻もケイ口を入小

店先の値段へ妻の甘い声

病んでから知る女房の有難味

成功の裏衣に潜んだ妻の智慧

汽車の窓妻は惜別を兒に言はせ

もう肥り氣にせず妻になつてゐる

新妻へ出足がにぶる靴の紐

老妻の愚痴を淋しくきく不遇

一輪の花にもこもる妻の愛

昇給へ妻と嬉しく街へ出る

妻の智慧借りて保証のペンを置き

新妻は貴方任せの柄にする

新聞へ眼鏡が欲しい妻も齡

寝ずに待つ妻へ感謝の軽い足

子を抱いて見送る妻のすゝり泣

佳作

今日からは妻と呼ばれて割烹着三木

も少しは羞恥られる妻の継布をあて素人

両方の義理へ下役妻の顔

肌ぬぎの妻があはてるドアの声

捕はれて妻の手紙に目があつて

以下略

投句

百十

静江

光葉

草雨

緑泉

牧東

柳華

亞州

留

子

泣水

光葉

一沙

竹涼

紫水

深泉

三木

素人

巴水

虎山

青山

BLOCK
19
30

川柳火曜會作品

課題「汗」 七月十三日 溪山 選

三光

一日の奴力かの汗へシャワーの味
豊穰へ流す希望の汗隠し
アトへの文段々積る日々の汗

佳作

先週の暑さに出来た子の汗が
耕した汗へ貰い芽を生かし
積年の汗した日記子に見せる
泣々と忍ぶ五す路の汗の跡
恙ない一家へ誇る男汗
呑む水を背に知る汗のメスの卓
登り坂今一息の汗を拭き
汗水を流し十六節のチヤキ
にしみ出る汗にはつきり夏を知り
ホストに陰日向なき汗の量
汗流す氣も晴々とシャワーの中
妻の口へ惚ぶむかしの汗の跡

秋月 時子 亜洲

秋月 緑泉 晩香 秋月 次彦 無名 杏葉 谷風 時子 緑泉 深泉 亜洲

課題「夕立」

忘れぬ汗に飛び込む風呂の味
素裸の汗に苦しむ午後三時
汗にしみ暑さへすゆる煽風器
たまごかの仕事矢鱈に汗を拭き

夕立のあとに飛び交ふ赤とんぼ
夕立に暫し其船の手が緩み
野良仕事止めと夕立雲が湧き
夕立のあとにはつきりと山の色
夕立の晴れて涼しい南風
夕立のあと賑やかな涼台
夕立のあとへはつきり空の星
夕立へ声高うして雨蛙
夕立の雲へ思安木の土用干
夕立に肌色変へた山姿
夕立のホスト地獄らうなり
夕立へ俄かに走る子の跣足
夕立の晴れてくまなし月の牙え
遠く見る夕立白く昏れる
あつけなく夕立雲に欺される

深泉 光葉 竜耳 亜洲 湖月 牧東 秋月 緑泉 時子 牧東 次彦 里江 小田原 無名 溪山

川柳句會

七月十八日

席題「記録」

高点順

言訳は兎も角記録繰つて見せ素人
就職へ過去の記録が物を言ひ
「記録事に見せないペーダあり
時局下の記録へ残す身の構へ
スポーツの記録時局へ小さく生き
転住の記録へ残す文藝誌
支出底合はぬ記録を繰つて見る
永年の記録を破る汗をふき
スピードの記録へ縮む航空路
レコードの暑さ西瓜の古ざわり
ホームラン兄の記録を一つ越え
転住地記録に残る趣味の跡
転住苦胸に記録の十二万
新記録沙漠に残すニ万人
次ぎく」とレコード破る暑さなり
優勝者レコード破り男泣
忠誠の記録出所のパーミット
レコードの日暮さに負けぬ野球戦

凡才 虎山 緑葉 里江 越香 牧東 時子 越香 大海 溪山 里江 虎山 牧東 汀村 胡仙 牧東 素人

下半期川柳採点録

紙上互選

選者選

席題

胡仙 一
鏡水 八
虎山 七
凡才 七
留雄 六
溪山 六
光葉 六
離羊 五
枯木 五
流水 五
兒氏 四
青山 四
童耳 四
素人 四
里江 四
まつる 以下略

絹子	彦四	三木	童耳	胡仙	露角	虎山	白雀	靜江	如骨	鏡水	五松	迷舟	草雨	光葉	守平	離羊	竹涼	留雄	巴水	柳華
五	五	五	五	五	五	五	五	五	六	六	六	七	七	八	八	八	八	九	一〇	一一
								緑泉	童耳	凡才	時子	緑葉	大海	溪山	汀村	虎山	里江	胡仙	素人	越香
								一	一	二	二	三	三	三	四	四	五	五	六	八

第三十二回ホスト川柳

課題 噂 島原潮風選

三光 星野光葉

時節板皮膚へ噂の忠不忠

田田柳華

始約の噂の主の付け黒子

花見留雄

遺児しかと抱いて噂へ負けぬ意地

客

外界の噂に迷ふ再移住

いニースデマでありたくない氣持

娘の噂母はキヤンフを狭く見る

娘の年へ夜の噂を怖く聞き

未亡人噂の中を派手に抜け

水乃

へマシグ噂の中の俺を聴く

噂でもよいと平和を待つ沙漠

若後家の噂賑ふ涼台

噂かうデマに更け行く涼台

娘の噂守聞いて思案の親一人

飛ぶデマをかみしめて聞く父であり

聖水

如骨

彦四

守平

鏡水

柳華

童耳

春波

守平

絹子

一沙

草十句

山本竹涼

つぎぐと噂の種がよく育ち 狂月

信念があつて噂へ遠く居る 三木

善悪の噂へ小さく住む身から 如骨

乱れ飛ぶ噂動せぬ肚の出来 絹子

噂してでられて混んでるシヤワの夕

集句 百六十六

◇◇◇

たんぼへの摘みもらされて花をつけ

草に寝て空の玉月さを見つめたり

川端に蛇もゐるまぜう草深み

踏まれても踏まれても尚道の草

草枯れて沙漠は夏の真盛り

假住居草花活ける氣のゆとり

若草を追ふ群羊へ晴れ渡り

故障車へ牛もふり向く草の中

風止めば元の次女の川柳

編輯

部屋



命かけ文藝、ほんとうにホストンの暑さは命がけた。去月廿五日(日曜)日、本年中での最高と思はれた暑さのヒ具、最中午後二時、部落四十六メスを借用して催されたホストン(和歌)の会、この日銀柱は百廿度の頂上に達し、それ以上は昇り、標がなく思案してゐると云ふ暑さの中に佳木まつた歌友十一名、永瀬宮村柳本柴田赤星井谷池田綾織岩永阿部久留島と虎山溪山凡才も加つた。

どうです今日はやりますかと皆標に訊ねば氷水でも頂いてやりませうとは流石に母の国の女性赤星さんのお言葉未とに角やらうと云ふ事に一決した。

その中に永瀬氏が百首にあまる作品を一つ批評並に添削なされた熱意、実に感激そのものであった、ヒ具実に強いホストン歌会の熱意と熱心であります。心頭を滅すれば火も尚涼しか。

兎も角わが民草が敷島の道を真直に進む時には何ものたりともその道を防げる事が出来ないのだと云ふ事を痛切に感じ教へられて嬉しく心強くなつた私です。お互にあの熱と熱を以て精進みませう。

とうとう編輯部屋が夏瘦にかつた為、に文藝誌も本月は瘦せて來ましたが皆標了解して下さる事と一人決めて居ります。九月は文協の誕生でもあり沙漠にも秋風が訪れる事と思はれますから投稿家の皆標一と奮発して下さい。声を大きくしてお願い申します。

〇黒いのが勝だ沙漠の健康児。へとくになつて印刷にかかる前思案投稿の体といった時十日朝の慈雨慰みの雨、ホストン人を蘇生をした雨だ。

天は自ら助くる者を助く、ほんとうに救はれた心地して機械を廻し始めた、今日はミメオグラフまで機械がい、酷熱に耐へて來た庭木キヤスターが榆の木が今朝の慈雨に会つて一夏の埃を

ポストン文藝協會創立一週年
記念特別號原稿大募集

創作、詩、民謡、隨筆、其他文藝作品

八月三十一日 締切

短歌、俳句、川柳の皆称から祝詠、祝吟をいだゞき、
本誌特別号を飾りたいと思ひます。八月三十一日まで
一首一句づゝお願ひ致します。

俳句 雜詠 毎月末日ノ切 短歌 五首まで 八月廿日ノ切

川柳 課題予生口

「転住所の種々相」三句 溪山 選
「眞劍」三句 紙上互選
八月二十五日ノ切

「汗」三句 潮風 選
「續く」三句 紙上互選
九月八日ノ切

50

「これから」三句 凡才 選
誤解 三句
九月二十二日ノ切

川柳 初步添削講座

題 蹴る 一人一句

島原 潮風 擔任
八月三十一日ノ切

各地文藝協會

モハベ文藝同人

楠瀬正美

309 POSTON ARIZONA

ヂローム文藝協會

山中桂甫

31-12-C JEROME ARK.

川柳朗和吟社

國次史朗

11-3-F McGEHEE ARK.

ミニドカ吟社

野間一沙

6-10-D HUNT IDAHO

ハートマウンテン吟社

三原吾以知

15-24-C HEART MOUNTAIN
WYOMING.

マンザナ文藝協會

宮地青雲

6-3-3 MANZANAR CAL.

ポストン文藝協會

矢形溪山

46-13-C POSTON ARIZ.

をきれいに洗ひ流して今日はほ、笑んで
ゐる。何程か嬉しい事であらう心地よい
事であらう。

○雨心地庭木にまでも分けてやり。

久し振りに雨の音を聞いた沙漠人い、心
地になつて熱燗で一抔ほしくなるのが人
情と見え逢ふ人が皆そう申すのである
から間違ひはあらず。

○熱燗の話がはづむ雨の音。

来々ばかりの手になる本誌段々と認めら
れて方々から激励のお言葉葉やらお便り
を頂いて感激して居ります。

特にサンタフィインターンキヤンプの句友、

塩出大洲兄よりのお便りは嬉しかつた。

皆々称頌張つて下さい。沙漠の中から祈

居ります。

○西界中柳にしよう新秩序。

○御無沙汰を詫言わばならぬ友の教。

○纏らぬ筆を墨磨さぬせいにする。

○もう山が見えた編輯汗を拭き。

一九四三、八、一二

凡 才

のほりきる水銀柱へ筆の汗。
しかられる覚悟すまない誤字の筆。
虎山

會計報告

六月 納入 七月 納入

維持会員寄附 四八六 維持会員寄附 四四八

正会員寄附 八〇〇 正会員寄附 一七〇〇

計 五八六 特別寄附 六〇〇

支出 計 六七八〇

支出

十日 切手 一〇〇 贈物 九九〇

十八日 〃 三〇〇 封筒 五八〇

二十三日 〃 一五〇 葉書 一〇〇

三十八日 ミネオダ 四六〇 計 一〇五

計 五一五 差引残高 一七五

差引残高 五一〇 計 五〇五

六月 七月 残金 計 五十五 五十五

五月末日まで 残金 計 十四 七十二

合計(七月三十一日現在) 残金 六十九 八十七

POSTON POETRY

CLUB
AUGUST 1943

ポ
ス
ト
ン
文
藝
協
會
ブ
ラ
ッ
ク
四
十
六
区
ホ
ー
ル

千九百四十三年八月十五日発行